

生と死の航跡

青春の樞

岡村治信

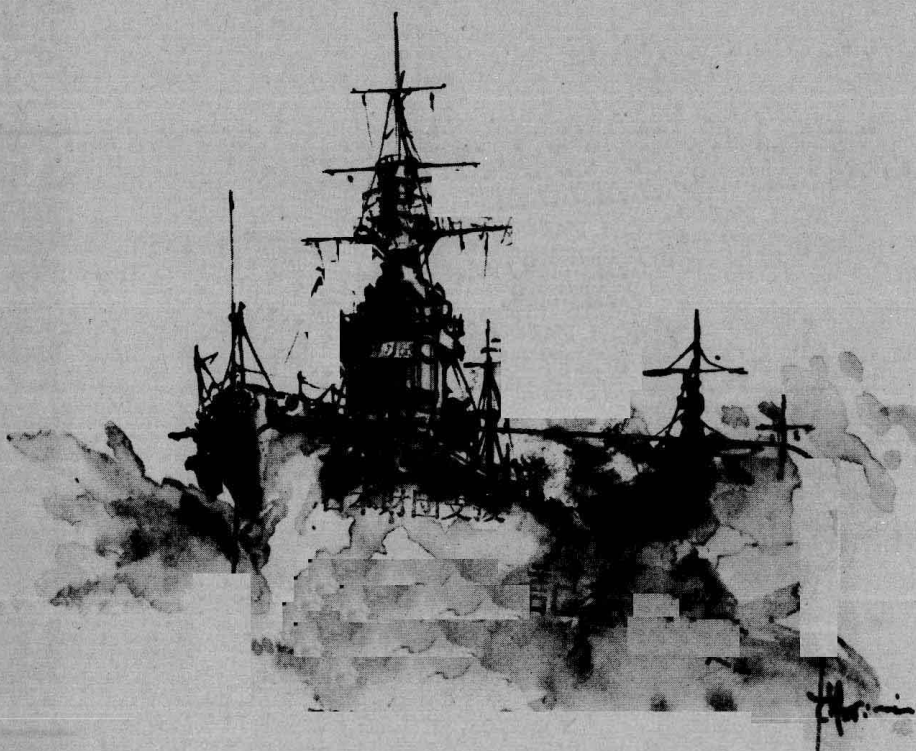


光人社刊

生と死の航跡

青春の枢

岡村治信



光人社刊



青春の^{ひつぎ}枢 生と死の航跡

昭和54年12月3日 印刷 980円
昭和54年12月15日 第1刷

著 者 岡 村 治 信
発行者 川 島 裕

発行所 株式会社 光 人 社

東京都千代田区九段北1-9-11
電話・東京 (265) 1 8 6 4~6
振 替・東 京 7-5 4 6 9 3 番
本文印刷・慶昌堂印刷株式会社
色彩印刷・有限会社興伸社
製 本・松 榮 堂 製 本 所

乱丁・落丁のものは本社またはお買求めの書店でお取りかえ致します
0095-10075-2241

まえがき

昭和十六年の春といえは、日本全体が混沌たる日華事變の処理に悩みながら、さらに暴走する軍国主義にほとんど併呑されようとしていた時期である。あたかも、このときに學業を終えたわれわれにとっては、なにはさておき、國民の義務として兵役に就くことが当然であつた。

ある者は陸軍に徴兵され、ある者は海軍を志願し、素人軍人として慣れない軍務に身を投じた。太平洋戦争の開戦を迎えてからは、ふりかかる冷厳な戦争の現実、青春のエネルギーを傾け尽くしたのである。そのあげく、多くの有為な人材が、あたら生命を断ち、あるいは回復したい傷痕をもつ身となつた。

幸いにしてこの犠牲をまぬかれた者には、一つの重大な使命が課せられた。それは、同胞の死を無駄にしないために、戦争の惨禍をかえつて民族の福祉とするために、力のかぎり生きぬくということである。これが歴史に対する生残者の責任である。

私もまた、戦後、年をへるにつれて、このような心の自負と、それにひきくらべて自分の生存の腑甲斐なさとおぼえる。ときには、狂躁の戦中生活を回顧しながら、うたた感慨に心の置きどころをうしなうことすらある。これらのことは、おそらく、厳しい戦争体験をもった人々には共通の心理であると同時に、戦争を知らない人々にはなかな

かに理解できないことではないだろうか。

そしてわれわれは、戦争体験から滲み出る何かを、とくに後の世代の人たちに語りかけたい衝動にかられる。われわれ自身の力では処理できない、あまりにも多くの、そして重要な事柄が、そのなかにふくまれていると思うからである。

多くの戦友のそれにくらべて、私の戦争体験はとくにきわ立ったもの、とはいえない。けれども、開戦時から満二年の海上勤務中、夜を日について第一線の作戦に参加し、いくたびかきわどい局面に立たされながら生命をまっとうしたことは、ひとえに戦運に恵まれたため、という以外には考えようがない。

ともかくも自分の生涯にとつての貴重な経験を保存するために、私は、これらの経過を、できるかぎり正確、詳細に記録することを思い立った。当時は、もとより軍機保持のきびしいときで、軍の作戦行動を個人的な記録に残すことはつづしまなければならなかったが、簡単な日記やメモをもとに、記憶や印象の薄れないうちに、軍務の余暇をさいて、少しずつ書きためていった。

筆をすすめるにあたっては、乗艦とともに行くさきさきに展開された自然と、それに触れあつて流動し飛躍した心の軌跡とを追及することが主題となった。とくに南洋方面の海や島々の透徹した美しさと、北洋の自然のおそろいほどの厳しさとは、私の心底をゆさぶるに十分であつた。私は、これら大自然の姿をありのままに描き、それに託して自分の心を凝視したかったのである。

また一方、いわゆる「学徒兵」の大多数が軍隊生活において味わつた精神的苦悩は、私の場合も、もちろんこれを避けることができなかった。むしろ、若き一途の思いに眠れぬ夜も幾夜かあつた。けれども、私が前線生活において自然と人事を通じて抱いたこれらの想念を、冷静な気持ちで整理統合していくと、結局、もっとも重要かつ根本的な、たった一つの極点に集約された。それは、生と死の問題である。

私にとっては、他のいかなる事柄も、人間の生死の問題より以上には、いささかの権威もち得なかつた。夏目漱石のことばによれば、人生における百般の雑事はこれすべて「喜劇」である。そして喜劇は、その場かぎりで捨て去られるべきである。

『最後に一つの問題が残る——生か死か、これが悲劇である。悲劇なるがゆえに、それは偉大である』

かくして私は、自作自演の悲劇を描こうとして、かえって未熟な構想だけを点綴させたにすぎないかもしれない。けれども、生身の人間をむりやり生死の問題に肉薄させるところに、戦争体験のきびしさがあふれている。私はこのきびしさに対し、若い心魂をひっさげて、おめざ臆せず立ち向かっていったことを、自分なりにひそかな誇りに思っているのである。モンテニユの随想録にもあるように、

『世の知恵や哲理の究極は、死を全く恐れないようにわれわれに教えるという一点に帰着する』

私は、この言葉を、終始、肌身から離すことができなかったのである。とにかく、このような志向のもとに海上勤務中に筆を起し、大部分は館山海軍砲術学校時代にとりまとめ、終戦後に補筆して稿了した。もとより、公表するつもりは全然なかったもので、そのまま綴じて戸棚の奥にはうりこんで置き、ときたま読みかえしては当時を追想していたのである。

昭和三十七年の夏、私は、この戦争で幾多有為の親友知己をうしない、前記のような心の重荷を負わされていることについて、小さな随筆を、ある雑誌に書いたことがあった。それを読んだ親戚知友から、くわしい体験記録があるなら公表してはどうかと熱心にすすめられた。私はそれを機会に、もう一度、この記録の塵を払って読みかえしてみた。そして、このような体験は、たとえ個人としての狭い範囲のものであっても、そのままの姿で後世に伝えるのがわれわれの義務でもあると考えるようになった。

昭和四十三年の夏、私は、東部ニューギニア、ビスマルク群島方面を旅行する機会に恵まれた。古戦場を再訪することは自分の人生史の焦点に触れることであり、自己の存在の原点に立ちかえることでもあった。あらためて平和な心で鳥瞰し回想すれば、青春を賭けた太平洋の戦域は、あまりにも広漠としてとりとめがなく、そこを支配するものは、ただ永遠のみであった。海と空に象徴される「永劫」の中に、戦争の究極の姿があることを、二十余年ぶりに確認したことによって、私は終戦いらいはじめて心の落ち着きをとれどしたように思う。

そして、いくたびか美しい死に接近しながら不思議に天国を拒否され、いらい四半世紀、地上の汚濁と混沌の中に生きのびていることにも、それなりの大きな摂理のあったことに気づき、自己の実存を再発見したことは、なにより

のよるこびであつた。こうした感慨もまた、この小著をあえて世に送ることへの大きな励みになっているのである。

以上のような次第で、本書の原稿はすでに終戦前後に一応完成していたものである。出版するにあたって、叙述の至らぬ点、表現の不適當な点を修正し、同時に全体を現代表記にあらためたことはもちろんであるが、当時の視点はそのまま維持し、今日の立場からの批判や感想はなにも書きくわえてない。

私自身としては、本書が、戦争体験によってある一つの死生観の形成される過程を、事実には忠実に記録したものと見て読まれることを望んでいる。もちろん、きわめて未熟かつ平板であつて、いまはもっと別の形に書きなおされるべきであることを痛感しながらも、自分にとっての魂の記念碑という意味もあつて、あえてそのままにした。

戦争体験とその回顧は、人それぞれによつてまことに千差万別である。人間にとって戦争とは、まさに壮烈の衣をまとつた醜惡と凄惨の魔物である。そこでは、栄光と屈辱、事実と想念、そして眞実と虚像とが、鋭く対峙し交錯する。時間と空間すら変流し、逆転し、それらがそのまま人の心に詩を生み、文学を育み、あるいは哲学や信仰となつて定着する。

このような荒れ狂う事実を、ありのままに記録し再現すれば、戦争体験記録としての役割は果たせるかもしれないが、否定すべくもない現実の事実をどう解釈し、自分たちのためにどう生かすかの問題は残る。戦争を眞剣に考えることは、この問題と取り組むことから始まる。もとより私は、自分の体験や戦争そのものを、思想的なものにまで昇華させるほどの力も意図もないが、こうした問題意識はつねに念頭を離れないのである。

終戦いらい刊行された多くの戦争体験記は、前記のような戦争のもつきわだつた性格、特徴を、正直に反映している。戦争が体験者の身に刻みこんだ抜きがたい焦げあとが行間に滲んでいる。その像はたしかに異様であり、また鮮烈である。しかし、そうであるからこそ、その中には貴重な、しかも深遠な教訓がふくまれている。

単に戦争は忌まわしく惨めなものという発想から、短絡的に、これらの形而上的な価値を捨て去つてよいであらうか。現に戦争は、あらゆる科学技術を、飛躍的に発展させた。精神文化の面においても、大きな跳躍台になりえない理由はない。いな、そうあらしめることが、われわれに課せられた名誉ある責務ではなからうか。

だれかのことばにもあったように、

『一人一人の戦争体験があるだけである。それ以外に戦争一般などありえない』

たしかに、抽象化された戦争一般は、もはや歴史上も、民族にとつても、それほど意味があるとは思われない。それだけに、一人一人の具体的な体験こそが、貴重なのである。いかに些細な経験であっても、その人のこころを痛め、肉体を攻め、存在をおびやかした限りにおいて、それは、れっきとした意味をもつ文化的遺産なのである。

戦争を生きのびた一人一人のそのような体験の中にこそ、正しい民族の自己省察と、歴史的証言があることを、われわれは信じたい。この底しれぬ鉱脈の中から、めいめいに教訓を掘りおこし、明日からの正しい生きざまを追求することが、「戦後は終わった」といわれる今日、なおわれわれに残された大きな課題であると思う。本書がそのような面になんらかの役割をもちうるならば、筆者としての幸せこれに過ぎるものはない。

出版にあたって、光人社の牛嶋義勝氏をはじめ、主として旧海軍関係の多くの方々にお世話になった。深く感謝の意を表する次第である。

昭和五十四年九月

岡村 治 信

『青春の樞』^{ひつぎ} 目次

まえがき

第一章

かがやく珊瑚礁

人生の一大関頭に立つ……………15

最前線ウエークへ……………17

あかつきの海原で……………21

虎口をのがれて……………27

人智の外にあるもの……………31

ふたたびウエークへ……………34

ひるがえる軍艦旗……………37

いつの日かわが身も……………43

勝者敗者、死者生者……………46

第二章

死と真実

忘れ得ぬサラモア……………54

ユーオン湾の海空戦……………56

第三章

美しき島々

生きている限りの賭け……………	64
デーモンからの脱却……………	67
俺は生きている！……………	70
うつくしき母国に……………	74
空母「祥鳳」沈む……………	77
珊瑚海の死闘の中で……………	83

いざガダルカナルへ……………	90
緊迫のソロモンを行く……………	94
南十字のかがやく戦場……………	98
マリンゲ待機の日……………	102
水漬 ^{みづ} く屍 ^{しかばね} と散る身の……………	107
米軍ガ島反攻の日に……………	112
戦機こっくと迫る……………	117
万に一つの成算なし……………	122

奇蹟は起こった！……………	129
---------------	-----

第四章 暗黒の怒濤

あゝ稲野兵曹長の死……………	132
はじめて見るアツツ島……………	135
北千島錨地あれこれ……………	137
運命の糸に操られて……………	140
キスカ増援におもむく……………	143
もうひとつの戦争……………	150
敵は吹雪の中にあり……………	153
カルピスは陸地の匂い……………	159
荒天の中に艦隊彷徨す……………	161
アツツ守備隊玉碎す……………	166

第五章 濃霧の奇蹟

奪回か、キスカ撤収か……………	173
-----------------	-----

第六章

喘ぐラバウル

それでも遺書は書かない……………	176
刻々と変わる運命の時……………	180
善悪の彼岸、純粹経験……………	185
突入の好機、到る！……………	189
幸運、また幸運の中……………	193
キスカ回想の日……………	198
アツツのみたま安けく……………	202
陸の精兵を乗せて……………	206
阿修羅のごとき戦い……………	211
わが胸のここの業火よ……………	216
一艦一生命、もえる心……………	220
熾烈な空中戦の下で……………	224
戦中二年の海上ぐらし……………	228
生と死のはざま……………	233

青春の 柁^{ひつぎ}

— 生と死の航跡

写真提供 小林新一郎・新城之介
および吉田一・雑誌『丸』編集部